

競走から共創へ 「馬と共に生きる」



宮崎 栄美

この牧場を開業してから今年で十二年目を迎えている。

目を閉じて、あの日の光景をこにつれて来る。どしゃ降りの雨の中、一匹の野良犬が走っている。急ぎ足で行くあてもなく雨をよけ走り続ける犬。私はそれを暖かい車の助手席から眺めている。寒い雨、空腹を満たすあてもなくただ走る犬。車から飛び出して犬を抱き上げ、乾いたタオルで身体をふく。彼の目から安堵の表情と不安の表情が表れ、私は話しかける。優しく頭をなでて：もう大丈夫だよ…。

目を閉じた思考の中でその犬を助ける。閉じた目を開き、雨に打たれて姿が見えなくなった犬の行方を目で探す。恵まれた結婚生活の中で不自由を感じたこともなく、好きな時に旅行に出かけ、欲しい

ものを買ひ、自分の時間を楽しんでいる私に、この犬一匹を助ける心の余裕が無いことに今更ながら驚き、戸惑った。私の心に自然と湧き上がる美しい感情を、いつも自ら打ち消していることに気づいた。

本当の自分は何処にいるのか。湧き上がる思いを無視し、真実の感情に蓋をして小さな心の箱に閉じ込める。そんな自分の生活は本当に幸せで、豊かで、調和がとれていると言えるのか？ 牧場を開業する五十三歳の寒い朝、本当の自分探しに気づいた瞬間でもあった。

一人の時間を楽しむことが好きな私はその日、リビングでお茶を飲んでみた。庭にある沈丁花の香りがかすかに漂ってくる。目を閉じてお茶の香りと沈丁花の香りを

特に馬糞堆肥は土壤改良効果が高く、地力を甦らせ作物が持つ本来の味や色合いなどを引き出してくれる。病害虫にも強くなれば農薬の使用量は減り、より安心安全な作物が育つ。

先にも述べたが、牧場から何一つ無駄を出さず、馬たちが生きていくだけで人の役に立ち、それが牧場に還元されて馬たち自身も快適に生きられるシステムの構築、それが私たちのこれからの夢である。簡単なことではないが、このサイクルが実現できれば、新しい養老牧場のモデルになれるのではないかと考えている。そして、あ

しずりダディー牧場が向かうのは単なる養老施設ではなく、将来的には医療体制が整った馬専門のホスピスを創り上げることなのだ。アメリカで生まれ、中央競馬という大きな舞台でターフを駆け巡り、熊本を経て最後の地としてあしずりダディー牧場にやってきたダノンゴーゴーは、温かい人間の愛に見守られて、静かにその生涯を終えた。特定の馬主がいなかったダノンゴーゴーだったが、たくさんさんの支援者に守られて快適な生活が送られていたと思う。三年間の

この牧場を開業してから今年で十二年目を迎えている。目を閉じて、あの日の光景をこにつれて来る。どしゃ降りの雨の中、一匹の野良犬が走っている。急ぎ足で行くあてもなく雨をよけ走り続ける犬。私はそれを暖かい車の助手席から眺めている。寒い雨、空腹を満たすあてもなくただ走る犬。車から飛び出して犬を抱き上げ、乾いたタオルで身体をふく。彼の目から安堵の表情と不安の表情が表れ、私は話しかける。優しく頭をなでて：もう大丈夫だよ…。

楽しむ。ふと、動物病院にあった馬の絵画を思い出した。躍動する馬の群れ、砂煙と嘶きが聞こえてくるようなその絵を思い出した瞬間、「私の残りの人生で、この美しい動物のために何かをやらなければ…」漠然とした曖昧さの中で、しかし私は確かな自分の決心を感じていた。

家族、友達、知人すべての人が私の牧場開業に反対した。すべての関係者たちが皆口をそろえて、その夢が実現できない理由を語った。しかし、私の心は叫んでいた。実現できない理由を並べるのではなく、どうすれば実現に向かうことができるかだ！なぜ人は自分の夢の前にある大きな山を見ると、できない理由ばかり並べるのか？。そう思うのと同時に、今までの私の人生もまた皆と同じように夢を

短い時間ではあったが、私たちはあなたをけっして忘れない。



多くの人に愛されたダノンゴーゴー

一方で、そういった穏やかな余生を送ることができない馬たちが、この世にまだまだ多くいるのが現実だ。走るために生まれてきた馬であっても、彼らはそれ以外にも多くの能力を秘めており、乗馬や馬術競技だけでなく人を癒す力や観光資源としても優れた魅力を持っている。しかし、その秘められた能力を試される機会も与えられずに闇へと葬られている馬たちがいる。

それぞれの馬たちの適性にマッチした場所と役割があれば、競走馬を引退しても彼らは社会と共存できるのだ。名馬と言われた馬も、

横目で見てできない理由をかざし、自分を説得していたのだと知った。五十三歳のあの日から、私は心の真実に向き合いたいと思ひ実行してきた。今、私は六十四歳。私が見ている風景は、緑の放牧場の中を馬たちが遊ぶ風景である。

今、静かに横たわる一頭の馬がいる。ターフを駆け抜けた栄光の記憶は過ぎ去り、本来の馬という自然の姿に戻り、信頼する多くの人々に寄り添われ、やすらぎの中で生きた日々。死に直面する彼に家族同然の慈悲の眼差しを注ぐ牧場のスタッフたち。

二〇〇八年三月十五日、中京競馬場のメインレースに、トップジョッキーを背にした彼の姿があった。一番人気の支持を得てゲートに入ると、観衆が固唾を呑む緊張の中でスタートが切られた。歓声と期待の中で彼、ダノンゴーゴーは最終コーナーを回って十八頭中なんと十五番手から三百メートルに足らない直線コースで強豪馬たちをまとめて差し切り、鮮やかな重賞初制覇を果たした。引退後は熊本で種牡馬となり、その役目を終えて彼が私たちの牧場に

名を残せなかった馬も、すべての馬たちに穏やかな生涯があるように願って、これからもあしずりダディー牧場は前進して行く。馬と共に生きる未来の素晴らしいシステムをつくるために。

●ダディー牧場のホームページ
<https://www.horsetrust-asizuri.com/>



GI (2015年NHKマイルカップ) 勝利馬・クラリティスカイ (中央) もダディー牧場で暮らす仲間のひとり (隣は筆者)



牧場HP▲

みやざき えみ

認定NPO法人あしずりダディー牧場 命の会 代表理事